

ウィラ・キャザーに於ける最良の歳月以後

——『アレグザンダーの橋』『教授の家』一考察

瀬 尾 素 子

Willa Cather は、彼女が完成した最後の短篇小説である “The Best Years” の中で、人生の「最良の歳月」について次の様に述べている。

Our best years are when we're working hardest and going right ahead when
we can hardly see our way out.⁽¹⁾

Cather はこの「最良の歳月」という表現を、さらに *Lucy Gayheart* でも用いて、若くして死んだ Lucy を “Perhaps it was no great loss to have missed two-thirds of her life, if she had the best third, and had been young.⁽²⁾” と評している。本論で取り上げていく *Alexander's Bridge* や *The Professor's House* も含めて、この「最良の歳月」という表現は随処に見られるが、Cather が考える「最良の歳月」とは、明らかに人生前半の 1/3 であり青春期である。さらに、この最良の歳月は、その盛りの時期には自覚されずに、既にその輝きを失った人生の衰退期にある者の回顧として描かれているのである。

Cather の作品に於ける典型的人間像というと、*O Pioneers!* の Alexandra や *My Ántonia* の Ántonia, *The Song of the Lark* の Thea 等、さながら大地の女神の如き活力に充ち溢れた幾人かの永遠の女性像から、さらに、多くの困難を克服して布教を成功に導き静謐と平安に満たされて辺境に果てる、後期の力作 *Death Comes for the Archbishop* のカトリック神父に至るまで、辺境の大自然の豊かさと厳しさの中で逞しくも生命力に充ち溢れて生きる人々である。彼等は、人生の喜びも苦難をも直視し、それに対応し得る強靱な精神力と豊かな活力を生れながらに身につけている。しかし、この様な豊かな生命力に溢れて時の経過の跡をとどめない大地神の如き Alexandra や Ántonia を創造して、尚、Cather は、さして強靱な精神力にも豊かな活力にも恵まれずに、時の経過と共に否応なく最良の歳月を過ぎて衰退期に向かう mortal な人間の苦悩にも絶えず関心を示して、最初の長篇小説 *Alexander's Bridge* から “The Best Years” に至るまで繰り返し描き続けている。辺境の大自然の厳しさと豊かさの中で逞しくも活力に充ちて生きていく人々の世界という Cather の作品評価の中では、この様な最良の歳月という考えにとりつかれて現実の生の衰退期を生きるごく平凡な人々の苦悩は、感傷、郷愁、脆弱さとして批判或い

は無視される事も多い。しかし、彼女の代表作で、最も生命力溢れる不滅の女性像を描いたとされる *My Ántonia* に於いてさえ、Virgil の “Optima die... prima fugit” (最良の日々は何にもましていとはやく過ぎゆく) という一節が巻頭引用されているのである。Cather の作品世界で、それ程華々しくは扱われないが、彼女が絶えず関心を寄せ繰り返し描いているのは、この「最良の歳月以後」の問題であると言えよう。本論では、人生の最良の部分が前半の1/3にあるという考えにとりつかれつつ、大地神の活力を欠いて生の衰退期を生きるごく普通の人間を主人公にした二作品 *Alexander's Bridge* と *The Professor's House* を取り上げて、大地神たる人物の不在、自我の分裂、個の一ライフサイクルと永遠の構図のあり方、死の体験と現実の生の直視といった幾つかの共通の問題と、それぞれの登場人物の対応の仕方に着目しつつ、Cather 特有の結末に至る過程を考察してゆきたい。

I

最良の歳月を過ぎて生の衰退期を、大地神の生命力を欠いて生き続けねばならぬ者の苦悩という、Cather の作品に繰り返し描かれる問題は、既に彼女の最初の長篇小説 *Alexander's Bridge* (1912) に明確に描かれている。*Alexander's Bridge* は従来 Henry James の未熟な模倣にすぎないと不評であり、辺境の大自然と人間像に Cather らしさを確立した次作 *O Pioneers!* が事実上の第一作と見なされることが多かった。しかし、徒らに他作家の影響とその模倣の未熟さを論じるよりも、Cather が以後の作品に繰り返し取り上げることになる最良の歳月以後という問題が既にこの作品に生硬ではあるが真摯に描かれていることに着目していく方が実り多いと思われる。

肉体的に見て主人公 Bartley Alexander は未だ生の衰退期に至っている様には見えない。後に考察する *The Professor's House* の St. Peter 教授も又、同様である。Cather は生の衰退期の設定を純粹に心理的段階にとどめておく為に意識的に、肉体的衰えが顕著になる老年期を避けている。その為、生の衰退期にある人物の年令を、青春から二十～三十年を経て、青春は決定的に過去となったが肉体的には未だ充実期を保っている四十～五十代に設定し、さらに、その人物に人並み以上に逞しく健康な肉体と社会的地位と経済的安定を付与しているのである。*Alexander's Bridge* の Bartley も、まだ四十三才で、大柄で逞しい健康な肉体を持ち、富と聡明で美しい妻に恵まれ、橋の設計技師として国際的名声を得て、油ののりきった仕事をしている。しかも明らかに彼は心理的には充実感を抱けずに衰退期を感知している。

Hardships and difficulties he had carried lightly; overwork had not exhausted him; but this dead calm of middle life which confronted him, —of that he was afraid. He was not ready for it. It was like being buried alive. In his youth he

would not have believed such a thing possible. (p. 38)

名声と比例して増大する仕事量と日常生活の些事に忙殺されながら、彼は否応なしに、現在と比べて「より良かった時期」として青春を回顧せざるを得ない。

He thought, as he sat there, about a great many things: about his own youth and Hilda's; above all, he thought of how glorious it had been, and how quickly it had passed. (pp. 35-36)

青春が過去であり最良の歳月であったというのは、生の衰退期を生きる者にとって大変苛酷な設定である。時間の逆行は不可能である。それ故、過去が「最良」であり“absolute value”⁽³⁾を持つということは、現在の生が、否応なく second best にしろ worse にしろ、決して過去以上にはなり得ない宿命を負うことを意味している。

Bartley は、かつて青春最良の時を共有した昔の恋人 Hilda の上に、最良の歳月を再現しようとするのだが、この Hilda の人物設定にも目をとめておくべきである。若い頃 Bartley と恋人同士であり、現在の Bartley にとってはまさに失われた青春そのものである Hilda は三十才になった今でも、かつての若々しさを十分とどめてはいる。しかし、彼女は Cather の他の作品にしばしば登場する、時の経過の跡をとどめ得ぬ大地神の如き生命力溢れる女性として Bartley をその豊かさと活力の中に融合する力は持たない。Hilda には、Ántonia 等の様な、人生の喜びも苦難も必然としてしっかりと受けとめて対応してゆける生来の豊かなエネルギーが欠けている。昔も今も Bartley を愛し続けて独身の頃の Hilda ではあるが、彼女は、青春時代に Bartley から「他の女性と結婚するから別れてくれ」との手紙⁽⁴⁾を受け取ると黙って身をひき、今、又、Hilda との関係を自分からは断ち切れない Bartley の「君の方から、もう会わないと言ってくれ——どんなに僕が頼んでも」⁽⁵⁾という身勝手な懇願を、他の愛してもいない男性との結婚を決意することではかなえてやろうとする様な、受身的で献身的な女性として類型化されているのである。この様に、Hilda が、Bartley を自らの生命力の中に融合してゆける大地神の様な女性として設定されなかった為に、Bartley は青春再現と絶望的時間逆行願望を Hilda の中に充足しきれずに苦悩しなければならない。“How jolly it was being young, Hilda!”(p. 54) と彼女に叫びかけつつ、一頁に数回も“remember”という語を用いて過去にのみ目を向けて青春回顧にひたる彼は、“I’m growing older and you[i.e. Hilda]’ve got my young self here with you.”(p. 83) と言いながら“Remembering Hilda as she used to be was doubtless more satisfactory than seeing her as she must be now.”(p. 35) と、共に年を重ねた生身の Hilda を直視せずに、彼女がみせてくれる青春の幻影に魅せられていることを暴露してしまうのである。

さらに、彼は若い頃の Hilda の幻の背後に存在するものに気づかざるを得ない。

He walked shoulder to shoulder with a shadowy companion—not little Hilda Burgoyne, by any means, but someone vastly dearer to him than she had ever been—his own young self, the youth who had waited for him upon the steps of the British Museum that night, and who, though he had tried to pass so quietly, had known him and come down and linked an arm in his.

It was not until long afterward that Alexander learned that for him this youth was the most dangerous of companions. (p. 40)

最良の歳月の再現を切に願う彼の意識の底から出現したのは、彼にとっては「危険な」“his own young self”であると語られる。Cather は、人間の青少年期を支配している生来の自我である original ego と、その後人生経験を重ねていく上で身につけていく social ego の二つの自我の問題をしばしば取り上げており、*Alexander's Bridge* の “his own young self” も、Cather のいわゆる original ego に一見類似している。しかし、後に *The Professor's House* の考察の際に詳述するが、Cather が描く original ego は、大地と森と水を愛する自然人として、再生と救済に深く関わっている。そして、Bartley のこの “his own young self” は、これとは正反対の様相を次第に明らかにしていく。“dearer” と描かれながら、この “his own young self” は、徐々に「危険な」と描かれた側面の方を露呈してくる。

I feel as if a second man had been grafted into me. At first he seemed only a pleasure-loving simpleton, of whose company I was rather ashamed, and whom I used to hide under my coat when I walked the Embankment, in London. But now he is strong and sullen, and he is fighting for his life at the cost of mine. (p. 100)

“his own young self” はここでは “a second man” と呼ばれて、Bartley を破滅と死へと追いつめていくハイド氏の存在であることが明らかになる。⁽⁶⁾ 青春が最良の歳月であるという考えにとりつかれて、しかも生の衰退期を生き続ける者にとって、青春の最良の歳月は、正負両面を持つと言えよう。一つは、この最良の歳月を不滅の美として時計の時間上ではなく心理的時間内に回復することによって、衰退期の生を生きる活力が与えられるという正の側面である。他方、時間は逆行しないのだから青春は同じ形では二度と取り戻せない、にもかかわらず最良の歳月を既に通り過ぎた現実の衰退期の生は以前と比べて worse でしかあり得ない、従っていかに不毛にせよ過去の回顧以外に状況を好転させる

てだてはないと考えて、現実の自己からの逃避、さらに現実の自己の否定から、破滅と死へと追いつめられていく負の側面である。*Alexander's Bridge* では、最良の歳月のもつこの負の側面が “his own young self” の形をとって Bartley を追いつめていくのであり、“I’m not a man who can live two lives.”(p.80) と叫ぶ彼は、次第にこの「危険な」 “his own young self” に侵蝕されて、本来の自己を見失っていくのである。

「最良の歳月とそれ以後」の問題に於ける Bartley のこのような状況は、彼が Hilda に宛てた手紙の中で、自らの心境を説明するのに用いる室内と窓外の構図の比喻に明らかである。

There is a garden out there, with stars overhead, where I used to walk at night when I had a single purpose and a single heart. I can remember how I used to feel there, how beautiful everything about me was, and what life and power and freedom I felt in myself. When the window opens, I know exactly how it would feel to be out there. But that garden is closed to me I am in my own house, in my own study But I am never at peace. (pp.99-100)

この室内と窓外の構図は、後に *The Professor's House* の考察の際にもう一度取り上げる問題であるが、ここでは、Bartley が居る部屋は彼の現実の生の部屋である。数々の社会的成功と富裕な家庭生活に、充足感ではなく束縛と倦怠感を覚えつつ、しかも彼はこの部屋に閉じ込められている。若い頃は自由に散策出来た星空の下の庭園は、現在の彼にとって青春の輝きそのものである。にもかかわらず、時計の時間である扉が時の逆行を拒んでしっかりと部屋を閉ざしているので、庭は現実の彼には窓の外に束の間、垣間見られるにすぎない。Bartley にとって不幸なのは、窓を通して入って来る庭からのすがすがしい空気が、窒息しそうな部屋に閉ざされている彼に生き続ける活力を与えるのではなく、逆に、現実の生の部屋に囚われの我が身を一層強く嘆かせるようにしか作用しないことである。囚われの意識と苛立ちは、閉ざされた扉を破壊してでも現実の生の部屋から庭へ出て行こうとする試みを生み、自己破壊と死につながっていくのである。それでも尚、部屋を出ることにのみ救いを求める時、最良の歳月の持つ負の側面に侵蝕された Bartley は、自らの生の破壊と死に至る危険な状況に追い込まれているのである。

最良の歳月の持つ負の側面にとらわれて、徒らに青春を生身の Hilda の上に再現しようとして、意識下にあった不毛な第二の自我である “his own young self” に侵蝕を許し自己崩壊をきたす Bartley は、当然の帰結として、不慮の死を遂げる。彼の人生の象徴でもある、自ら設計した世界的規模の Moorlock 橋が、彼の設計ミスに他の悪条件が重なって崩壊する時、現場で指示を与えていた Bartley は橋から墜落して溺死する。しかし、精神的に脆弱だったこの主人公は、唯一、死の場面に於いて、意識内でしっかりと生に踏

みとどまって、Cather 特有の生の受容の中に、*The Professor's House* の結末へとつながっていくのである。溺れながら彼の死の直前の意識は次の様に語られる。

For a moment, in the depths of the river, he had realized what it would mean to die a hypocrite, and to lie dead under the last abandonment of her tenderness. But once in the light and air, he knew he should live to tell her and to recover all he had lost. Now, at last, he felt sure of himself. He was not startled. It seemed to him that he had been through something of this sort before. There was nothing horrible about it. This, too, was life, and life was activity, just as it was in Boston or in London. He was himself, and there was something to be done; everything seemed perfectly natural. (p. 124)

かって、あれ程彼を苦しめた二つの life は、死を目前にして一つに融合する。現実の生と青春の最良の歳月は、互いに侵蝕し合うのではなく、いずれも真実として彼の意識内に同時に存在し得る様になる。この、意識内での青春の負の側面の消失と現実の生の受容は、一見唐突に見えて少し前から心理的伏線がはられている。遂に Hilda との駈落ちを決心して妻に別離の手紙を書いた Bartley は、その直後に Moorlock 橋の工事の危険を告げる緊急呼び出しを受けるのであるが、現場に急行する列車の中で、彼は Hilda との駈落ちについて “And for what? For a mere folly, a masquerade.” (p. 112) と自問自答する。*Alexander's Bridge* の原題が、*Alexander's Masquerade* であったこと、さらに *Alexander's Bridge* の「橋」が Bartley の人生を象徴している事を考える時、ここで Bartley の意識に浮んだ “masquerade” という言葉は意味があると言えよう。現実の Hilda と駈落ちをするという形での最良の歳月の再現が、実体をともなわない “masquerade” と気づいた彼は、 “That was not the reality of his life.” (p. 119) と思い至る。その時点で、彼を破滅に追い込んでいた青春の負の側面である “his own young self” は、まさに reality を失って消失する。絶望的時間逆行願望、そこから生じる自己破壊と死への直進という、最良の歳月の帯びる負の側面は消失する。しかし、彼の人生そのものである Moorlock 橋が、彼の到着が一日遅れたが故に、なすすべもなく崩壊する様に、ここまで “his own young self” の侵蝕を許してしまった彼の本来の自我は、容易には回復されないところまで来てしまっている。橋の崩壊が避けられないことを知って尚、 “It's a jolt but we've got to face it.” (p. 122) と言いきる Bartley は、時すでに遅しとはいえ、今まであれ程欠けていた自らの現実の生を直視するという力強い姿勢で本来の自己を取り戻している。水中で彼は、今まであれ程逃げ出そうとしていた妻と彼女の象徴する現実の衰退期の生に生きて戻りたいと願い、又、戻り得る活力を取りもどすのである。彼の意識内で、妻のいるボストンでの生と、Hilda のいるロンドンでの生が、相克葛藤することなく共存する時、

先に述べた室内と庭園は、近景と遠景として一つのパースペクティヴにおさまる筈である。しかし、この様な現実の生の受容は Bartley の意識をかすめただけに終り、皮肉にもやっと生き続け得る心境に達したまさにその時、“strong swimmer” (p. 124) であるにもかかわらず Bartley は、続いて橋から転落して来た人々に次々としがみつかれて、身動きがとれずに溺死してしまうのである。

青春という最良の歳月が否応なしに帯びる負の側面の作用が強すぎた為に、そしてその侵蝕を許した Bartley の頑健な肉体に潜む精神の脆弱さ故に、彼は、意識内では現実の生への回帰を果しつつ、肉体的には死に至らざるを得なかった。しかし、自ら特別に豊かな活力を持ち得ないごく普通の人間として設定された Bartley が、壮年期の物質的安定に安住することなく、ひたむきに真摯に、最良の歳月以後という人生の問題に取り組んでいった過程は、未熟ながらも最初の長篇らしい清新さにみちて、常に死ではなく生の受容という Cather らしい結末へと至っているのである。そして、最良の歳月の負の側面が強力すぎた故に、正の側面を十分にとらえきれなかった Bartley の残した問題は、E. K. Brown⁽⁷⁾ もその類似を指摘している *The Professor's House* の St. Peter 教授へと継承されてゆくのである。

II

1925年に出版された Cather 中期の代表作の一つである *The Professor's House* も又、*Alexander's Bridge* 同様、最良の歳月を過ぎて人生の衰退期を生きる大学教授が主人公である。この小説について Cather は自らオランダ絵画の比喻を用いて次の様に語っている。

Just before I began the book I had seen, in Paris, an exhibition of old and modern Dutch paintings. In many of them the scene presented was a living-room warmly furnished, or a kitchen full of food and coppers. But in most of the interiors, whether drawing-room or kitchen, there was a square window, open, through which one saw the masts of ships, or a stretch of grey sea...

In my book I tried to make Professor St. Peter's house rather overcrowded and stuffy with new things; American proprieties, clothes, furs, petty ambitions, quivering jealousies—until one got rather stifled. Then I wanted to open the square window and let in the fresh air that blew off the Blue Mesa, and the fine disregard of trivialities which was in Tom Outland's face and in his behaviour.⁽⁸⁾

この室内と窓外の構図自体は、先に考察した Bartley の考える室内と庭園の構図と似ていると言える。部屋は、生の衰退期にある者の現実の生である。歳月の経過と共に、世俗の

家具が否応なしに増え、決して逆行しない時計の時間の扉で外とは遮断されて、この教授は現実の生の部屋に息苦しい思いを抱きつつ束縛されている。Bartley の部屋と異っているのは、窓外の景色の室内に及ぼす作用に関してである。*Alexander's Bridge* の窓外が、その素晴らしさ故に、外に出てゆけずに室内に囚われている Bartley の焦燥感を一層かきたてたのに対し、*The Professor's House* に於いては、Cather は、窓外の景色を、現実の生の部屋で耐えて生き続ける者の活力の源となる様に意図している。具体的に *The Professor's House* での窓外は、教授が自らの「第二の青春」と呼ぶ、「青いメイサ」とそこですごされた Tom Outland の青春最良の時である。窓外の景色は室内にさわやかな風を吹き込み、現実の生の中で耐えて生きてゆける為の活力を与えてくれる永遠の美である。このオランダ絵画の比喻では、室内と窓外は見事に近景と遠景として一つのパースペクティブにおさまっている。Cather のこの執筆意図が実際に小説の中で、どの程度生かされ、どの様に最良の歳月以後の問題に関わっているかを以下見てゆきたい。

The Professor's House は、世俗的な成功の代償として否応なしに侵入してくる物質主義的思考方や、現世的欲望に支配された俗物的人間との関わりという面で取り上げられることが多い。しかし、この様な避け難い現実の生の煩わしさの中で、主人公 St. Peter 教授が取りつかれているのは、ここでもやはり「最良の歳月」としての青春である。自らの青春を “the happiest years of his youth” (p. 4) という風にとらえざるを得ない教授は、青春を最上級でとらえつつ、同時に、それが過ぎ去ってしまったという意識にとりつかれている。

Lillian had had the best years of his life, nearly thirty, and joyful years they had been, nothing could ever change that. But they were gone. (pp. 279—280)

St. Peter 教授も、Bartley 同様、肉体的外見的には生の衰退期にあるとは言い難い。現在五十二才である教授は、虚弱な肉体の青白いインテリではない。自分の家から見晴らせるミシガン湖での水泳を好む教授は、“tireless swimmer” (p. 5) であり、素晴らしい骨格と引き締った腰とバネのある肩という見事な肢体を保っている。そして仕事面でも、彼は今まさにライフワークを完成し、それによって学者としての国際的名声と金銭的報酬を得たところである。長年の古くて不便な借家住まいの後に、広く快適で立派な家を新築して家族も引っ越しをすませ、あとは教授が移り住むのを待つばかりである。この様に外見的にはまさに生の充実期にあるかに見える教授は、しかし、過ぎ去った青春を最上級でとらえつつ、“gone” (p. 280) “could'nt keep” (p. 121) と感じて、Bartley と同じく、心理的には既に生の衰退期にあると言えよう。教授の “tireless swimmer” というイメージも、“strong swimmer” と言われた Bartley の不慮の溺死、さらには *Lucy Gayheart* で、Bartley や教授と同じ生の衰退期の苦悩を抱く中年の世界的歌手が “strong swimmer” と描かれてや

はり不慮の溺死を遂げることを考え合せると、この小説の結末で死の淵までゆく教授の、肉体的逞しさの内に潜む死に至る程の精神の脆弱さを暗示していると言えよう。教授は、自分が最良の歳月をすごした古い家から新しい家に引っ越していくのを拒むことで、無意識の内に、Bartley と同じく絶望的時間逆行願望にとりつかれて、自分の衰退期にある生という現実を認めたくないのである。

Bartley の青春は Hilda との恋愛にあったが、St. Peter 教授の青春は、妻 Lillian との恋から結婚に至る歳月と、さらには自ら「第二の青春」と名付けた Tom Outland との出会い、Tom を通して知った青いメイサにあった。彼と第一の青春を共有した妻 Lillian は、*Alexander's Bridge* の Hilda と同じく、大地神 *Ántonia* 等の豊かな活力を持たない存在として設定されている。その上、現在の彼女は、夫とは価値観を異にする物質的世俗的女性になっており、教授は妻の上に青春の幻すら見ることが出来ない。いきおい、教授の意識は、彼の第二の青春である Tom Outland と青いメイサの思い出へと向けられていく。

Tom Outland が青春最良の日々をすごした青いメイサの挿話は、Tom の日記という形で、三部構成のこの小説の第二部全部を割いて語られている。先に述べた Cather のいわゆるオランダ絵画の構図の実践として、この第二部のメイサの挿話は、第一部第三部で描かれる教授の現実の生に、涼風を吹き込む窓外の景色の役割を果していると言えよう。メイサとは、アメリカ南西部特有の頂部が水平なテーブル状の岩山であるが、この青いメイサは次の様に描かれている。

The Blue Mesa was one of the landmarks we always saw from Pardee—landmarks mean so much in a flat country. To the northwest, over toward Utah, we had the Mormon Buttes, three sharp blue peaks that always sat there. The Blue Mesa was south of us, and was much stronger in colour, almost purple. People said the rock itself had a deep purplish cast. It looked, from our town, like a naked blue rock set down alone in the plain, almost square, except that the top was higher at one end. (p.183)

この頂上には、かつて栄えた古代インディアン の遺跡がある。Cather は他の作品の中でも、古代文明の遺跡を、輝かしい過去の凍結、時計の時間の停止により時間を越えて不滅化された永遠の美として、苦悩する登場人物に生命力を吹き込み再生のきっかけを与える存在として描いている。*The Song of the Lark* で、自らの歌手としての才能に疑いを抱いて悩む Thea に再生の力を与えたアリゾナのパンサー峡谷の岩窟住民の遺跡が、その典型である。*The Professor's House* に於けるこの青いメイサと頂上の遺跡も、まさに Tom とそして教授に生命力を吹き込む永遠の美そのものである。さらに、その息をのむ

程美しい大自然と、世俗的生活や物質主義の悪徳を完全に免れた、原始的で自然にかなった生活の跡は、後述する教授の本来的自我である Kansas boy のイメージとも重なっている。青いメイサの頂上の遺跡は次の様に語られる。

Such silence and stillness and repose—immortal repose. That village sat looking down into the cañon with the calmness of eternity. The falling snowflakes, sprinkling the piñons, gave it a special kind of solemnity. I can't describe it. It was more like sculpture than anything else. I knew at once that I had come upon the city of some extinct civilization, hidden away in this inaccessible mesa for centuries, preserved in the dry air and almost perpetual sunlight like a fly in amber, guarded by the cliffs and the river and the desert. (pp.198—199.)

断崖と川によって後世の人々の侵入を阻み、乾燥した空気によって完璧に保存されて、見事に時間を凍結した古代インディアンの文明がTomの眼前に往時の美しさをその俣とどめて広がっているのである。過去が不滅のままで現在と一つのパースペクティブの中にとらえられる瞬間である。青いメイサは、Cather の執筆意図通り、時間軸を凍結した永遠の美を垣間見させてくれたのである。

青いメイサは、永遠の美であり、そこで青春最良の時をすごした Tom Outland の青春の象徴であった。そして、Tom を自らの第二の青春と呼ぶ St. Peter 教授にとっても、それは青春の象徴であった。だが、Tom の親友 Rodney とのいさかいと別離、Tom 自身のメイサからの立ち去りという一連の行為によって、Tom がメイサですごした日々は終止符を打たれる。さらに、Tom とメイサによって生命力を吹き込まれた教授の「第二の青春」の日々は、Tom が若くして戦死してしまうことによって、終止符を打たれるのである。過去のより良き時代の思い出のつまった古い家から引っ越すことを頑なに拒み、Tom のメイサですごした日々を一人整理する教授は、再び、Bartley を死に至らしめた最良の歳月の持つ負の側面に侵蝕されて、現実の生を生きぬく活力を得られぬまま、現実逃避と自己破壊への危険な道を辿っているのである。

だが、新しい立派な家へ移るのを拒否し、富裕な長女夫婦のヨーロッパ旅行への誘いを断って、頑なに世俗的商業主義的悪徳や金銭的恩恵を拒みつつ、自らを凝視する姿勢をくずさなかった故に、Tom やメイサでさえも失われた過去と感じざるを得なかった教授の心に、思いがけなくも戻って来た者がいた。少年時代の彼自身である。

Tom Outland had not come back again through the garden door (as he had so often done in dreams!), but another boy had: the boy the Professor had long ago left behind him in Kansas, in the Solomon Valley ---the original, unmodified

Godfrey St. Peter. (p. 261)

この少年時代の自己の出現は、*Alexander's Bridge* に於ける Bartley の “his own young self” の出現と一見似通っている。しかし、教授にとって幸いなことに、彼の内なるもう一人の自己であるこの Kansas boy は、*Alexander's Bridge* であれ程 Bartley の心を侵蝕して遂には破滅をもたらすことになるあの「危険な」“his own young self” とは根本的に異っていた。Bartley は、この第二の自我をやがては “That was not the reality of his life.”^[11] と気づかざるを得ず、しかも時すでに遅しで破滅していくが、教授は反対に、この Kansas boy を “the realest of his lives” (p. 261) とみなすことが出来るのである。この Kansas boy は、教授の仕事や結婚、人間関係、金銭問題等々、社会生活を長年営んでいく上で二次的に身につけてきた「社会的自我」 (“this secondary social man”)^[12] の為に意識の奥底に沈められていた、本来かくあるべき、真の、世俗的汚れに染まらない、彼の「本来的自我」 (“his original ego”)^[13] であると語られる。さらに、大地と森と水を愛す原始人であると語られるこの少年は、青いメイサと古代インディアンの原始的で素朴な生き方を愛する Tom Outland と重なりあっている点で重要である。Tom 自身は、既に戦死によって、時計の時間軸上では、過ぎ去った過去に属する存在である為に、最良の歳月のもつ負の側面の作用を教授に及ぼしかねない危険性をも合せもっていた。しかし、教授の本来的自我であるこの Kansas boy は、青いメイサと Tom のイメージと重なりあって、それらの素晴らしさをそのまま保ちつつ、しかも、時計の時間の非逆行性の支配を受けない、純粋に教授の心理的時間内に、過去と現在の枠をとりはらって、回復されたのであった。そして、この Kansas boy は、大地や森や水を愛する原始人として Tom やメイサと重なり合って、明らかに現実の生の部屋に生命力を吹き込む窓外の役割を果たして、しかも、純粋に心理的時間内の存在として時計の時間の支配を超えて、作者のいわゆるオランダ絵画のパースペクティブを完成したと言えよう。

回復されたこの本来的自我は、さらに、真実そのものであり大地であると語られる。

The Kansas boy who had come back to St. Peter this summer was not a scholar. He was a primitive. He was only interested in earth and woods and water. . . . He seemed to be at the root of the matter; Desire under all desires, Truth under all truths. He seemed to know, among other things, that he was solitary and must always be so; he had never married, never been a father. He was earth, and would return to earth. (pp. 262—263.)

大地は Cather の作品世界を考える上で重要な問題の一つであるが、*O Pioneers!* で、大地の化身の様な女主人公 Alexandra の述べる “We come and go but the land is

always here.”⁽¹⁴⁾ は、大地の意味を端的に物語っていると言えよう。Cather の作品世界の典型的な人間像である *Ántonia* や *Alexandra* の様な人々は、生来、人生の喜びも悲しみをもしっかりと受けとめて、尚、豊かな生命力を保ち続ける選ばれた人々であり、不滅の大地そのものである。他方、*Bartley Alexander* や *St. Peter* 教授の様な人々は、大地神としては選ばれずに、生来もろい心を抱いて人間の mortal な側面にとらわれて苦悩するごく普通の人々である。しかし、たとえ彼等が不滅の大地そのものの生命力を欠いているとしても、彼等にとっても自分が大地の上に立っているという認識は、深い意味を持つのである。人の短い一ライフサイクルの中しか見えずに、生の衰退にしか目を向けられずに、遂には現実逃避から、現実否定と死へと傾きがちな者にとって、大地に触れることは、人の短い一ライフサイクルを無限に繰り返しつつ存在する創造の根源としての大地、不滅にして絶えず再生を繰り返す大地にふれることは、永遠というパースペクティブの中で自らの一ライフサイクルの生を見直し得るという意味を持つのである。

古い家に一人で住んでいた教授は、古いガスストーブの不完全燃焼によるガスの充満で死の淵まで行って、危うく助けだされる。この体験を経て教授は、妻や家族や古い家への感情的執着を最終的にそぎ落して、次の様な境地に至る。

His temporary release from consciousness seemed to have been beneficial. He had let something go—and it was gone: something very precious, that he could not consciously have relinquished, probably.... he felt the ground under his feet. He thought he knew where he was, and that he could face with fortitude the *Berengaria* and the future. (p. 281)

意識があれば決して手離せなかった何か、即ち一ライフサイクル内への過度のこだわりを、死を通過することによってそぎ落した彼は、今、足下に大地をしっかりと感じている。*Alexander's Bridge* の *Bartley* は、自らの人生の象徴である「橋」の崩壊を目の前にして “We’ve got to face it” (p. 122) と間接的に現実の生の直視を表明して、彼の心理的再生のきっかけとなしているが、同じ様な言葉 “he could face...” が死を通過した教授の口からも語られて、彼等二人共、最終的には現実の生の直視と受容に至ったことがうかがえる。さほど豊かな活力にも強靱な精神にも恵まれない、ごく当り前の人間である教授が、様々な苦悩の過程を経て到達したこの結果は、大地を足下にとらえつつ、現実の衰退期にある自らの生を直視するというCatherらしいしめくくりとなっている。

死すべき生身の人間にとって、又、人間を扱っている小説に於いて、mortality と immortality は普遍的な主題である。死に魅せられた作家達にとっては、mortal な一ライフサイクルの生の中に瞬間的に永遠を垣間見ることも、その様な束の間の生からの

恒久的な解放としての死こそ永遠の真実であった。しかし、Cather はあくまで死ではなく生の側に真実を求める作家であった。死すべき人間にとって、束の間にしろ生の中にとらえた永遠は、短かい一ライフサイクルを生き続ける活力の源となり得ると、彼女は考えていた。不滅にして絶えず再生を繰り返す大地のパースペクティブの中で、一ライフサイクルの生を受容していくのが、彼女の作品世界の特質である。Bartley も St. Peter 教授も、死の淵まで行くが、決して自ら死の中に永遠の真実を見出して、死に救いを求めている。彼等が実際に死に至るかどうかとはい関係なく、彼等は少くとも意識内では、明らかに生の直視と受容に至っていることは、本論で既に跡づけてきた。Cather は代表作と言われる一連の作品で、生命力の豊かな大地神ともいうべき人間像を、不滅の大地との融合の中に描いて生の賛歌とし、他方、この様な大地神たり得ない、精神的にもろいが故に苦悩するごく平凡な人々と、青春こそ最良の歳月であるという考えにとりつかれつつ生の衰退期を生きる彼等の苦悩を取り上げている。そして、彼等を主人公にした *Alexander's Bridge* や *The Professor's House* も又、最終的には、不滅の大地のパースペクティブの中に個の一ライフサイクルをとらえ、現実の生を「直視する」(“face”) という共通の結末に至って、常に死ではなく生をみつめて受容していく Cather の特質が明らかにされているのである。

注

Willa Cather の作品の引用は *The Novels and Stories of Willa Cather* (Boston:Houghton Mifflin, 1937-8;rpt. Kyoto:Rinsen Book Company, 1973), 13vols. による。

- (1) “The Best Years”, *The Old Beauty and Others* (New York : Vintage Books, 1976), p. 136
- (2) *Lucy Gayheart*, p. 224
- (3) cf., *Alexander's Bridge*, p. 39
- (4) *Ibid.*, p. 29
- (5) *Ibid.*, p. 83
- (6) E.K. Brown, *Willa Cather : A Critical Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1953), pp. 156-7.
 “The emergence of this second self was for a while delightful to Alexander.... So it had been with Dr. Jekyll, whose second self was also much younger than his respectable nature.... When Dr. Jekyll first assumed the personality of Edward Hyde, what he felt was what Alexander would wholly have understood.... The outcome for Alexander is what might be predicted in the light of our memory of what befell Dr. Jekyll. Although Stevenson was one of the authors Willa Cather most often reread, and his symbolic tale may have suggested, or clarified, the idea for *Alexander's Bridge*, between his work and hers there are immense differences.
- (7) *Ibid.*, p. 155.
- (8) Willa Cather, “On *The Professor's House*”, *Willa Cather on Writing : Critical Studies on Writing as an Art* (New York: Alfred A. Knopf, 1962), pp. 31-32
- (9) *The Professor's House*, p. 256 “Just when the morning brightness of the world was wearing off for him, along came Outland and brought him a kind of second youth.”

ウィラ・キャザーに於ける最良の歳月以後

- (10) *Lucy Gayheart*, p. 141
- (11) *Alexander's Bridge*, p. 119
- (12) *The Professor's House*, p. 262
- (13) *Ibid.*
- (14) *O Pioneers!*, p. 261